13年の足音(あしおと)

Footsteps of Thirteen Years

遠坂 勲*

1. はじめに

港区麻布台にある三貴ビルの薄汚れたビニタイル張りの階段を2階まで上がり、有機合成化学協会と表札のかかっている鉄の扉を開けると窓、壁側には天井まで達している書棚、中央には事務机が5つ、この事務室の隣りには会議室とも作業室ともなるテーブルと椅子のある小会議室、一日中ほとんど太陽光の恩恵に浴しない薄暗い事務所、これがわたしと協会との最初の出会であった。1980年4月1日、中村正三前事務局長の後任として勤務してから間もなく13年となる。今月末に協会を去るとなると感慨無量だが、この間苦楽を共にした事務局員はもとより、お世話になった協会を訪れた人びとの足音(あしおと)が忘れられない。今日よりは明日へとよりよい協会を築こうと歴代の会長、副会長、理事、委員の方々が新企画、新事業、会員増強に努めてくださったおかげで、会員は約千名の増、財政的にも約6倍の増となり、13年前より協会の基盤はかなり強化されたものと思う。ここに13年の総括を記録に残しておくことがわたしの義務と思い、拙い筆をとった次第である。

なお、13年間の時の動き(時系列)は本文中の年表を、また、協会の創立から今日までの歩みについては、昨年12月に発行の本協会誌、有機合成化学協会創立50周年記念号の「協会と協会誌の歩み」Vol.50 No.12(1992)を参照されたい。

2. 2つの記念事業

わたしの在任中、創立40周年と50周年の2つの記念事業に参画できたのはこの上ない喜びである。2つの事

業の性格は自ずと異なっており、40周年は協会財政基盤の強化をはかる点に対し、50周年は50年という大きな節目に当たるので、レベルアップされた協会の現状を内外にPRすることに主眼をおいた点である。

創立40周年(1982年8月1日)記念事業については、亀谷哲治会長のもと間藤太雄副会長を委員長とする実行委員会(井上祥平、古賀憲司、白石振作、竹居光二、富樫英一、右田俊彦、御船 昭、吉田政幸の諸氏)で立案した。事業推進のため維持会員213社から臨時会費2,600万円(目標の約90%)の拠出をいただき財源とした。臨時会費の募金に際し、1981、1982年度の理事会メンバーが一致協力してこれに当たった。その2/3を特別賞基金と研究交流基金にあて、残りの1/3を記念講演会、祝賀会、記念シンポジウム、記念特集号、会員名簿の発行等々に使用した。なお、計画から除外されたものに事務所移転問題があったが、この件は財政的に体力がなかった1991年に化学会館に移転し、日の目を見ることとなった。記念号は右田編集委員長が中心となり、1982年の11月に40周年記念特集号「有機合成化学の最近の進歩と明日への展望」を発行した。記念講演会は福井謙一、向山光昭、村松正実の諸氏を講師として1983年2月19日、日本工業倶楽部で盛大に挙行了。記念シンポジウムは、6月1日科学技術館において「明日をひらく有機合成」のテーマのもとに小野田 武、田伏岩夫、野依良治、森 謙治の諸氏の講演後パネルディスカッションを行った。会員名簿は事務局が担当し、7年ぶりに1983年5月発行した。記念出版物「有機化合物辞典」は、亀谷会長を編集委員長として講談社より1985年に発行したが、小委員会の吉田政幸、刈米孝夫、武井 尚、夏目充隆、山本久夫の諸氏には裏方のご苦勞をおかけした。研究交流基金については、その果実による助成金により第1回の夏季大学を1983年8月1~3日昭和薬科大諏訪校舎で開催した。古賀事業担当理事が責任者となり、1982年度奨励賞受賞講演、特別講演等を行った。夏季大学の2回目以降は、6支部持ち回りで行うこととなり、(1993年度は第11回)支部の活性化に大いに貢献してい

* Isao ENSAKA

[略歴] 1949年東京工業大学理学系化学コース卒

1949~1980年三菱化成(株)勤務

主として研究部門を歩く

1980~1993年(社)有機合成化学協会勤務

[趣味] 山散策、熟年テニス、広く音を楽しむこと

[ひとこと] 恩師の教え「深は新」を「心は新」にかえ第3の人生へ

西 暦	1979	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94				
年 号	S 54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	H 1	2	3	4	5	6				
代 表 会 長	25 太田暢人		26 亀谷哲治		27 大塚時雄		28 野崎 一		29 竹西忠男		30 向山光昭		31 岸田有吉		32 森 謙治					
特 記 事 項 *1			関東支部、東北・北海道支部設立(6支部体制)									事 務 所 移 転								
				創立40周年記念講演会・祝賀会・シンポジウム									創立50周年記念							
				夏季大学				若手研究者のためのセミナー					国際シンポジウム							
				特別賞制定・メダル作成					研究企画賞制定				祝 賀 会							
				論文賞を廃止し奨励賞制定・協会賞増強											連続座談会					
		他機関の賞推薦				総合研究発表講演会を有機合成シンポジウムに変更											会 章 作 成			
		協会役員増強				支部割当金増				文部省科学研究補助金打切										
				学生会員入会斡旋料				新会計基準				名誉会員改正								
		広告取扱社共栄通信社				学術会議改正(13期)														
							オーガニック(希望者)				オーガニック(学生)									
出 版 物 *1			記念号(11月)										記念号(12月)							
			会員名簿		有機化合物辞典 (記念出版)		カラーケミカル事典				Organic Synthesis in Japan(記念出版)									
会費値上 *1		維持会員		正会員・学生会員							有機合成実験法ハンドブック									
		臨時維持会費									正会員・学生会員									
会費増強 *1		正・学生・維持		学生		維持				維持(格上)										
正 会 員		4136	4187	4229	4215	4246	4328	4425	4509	4610	4752	4831	4871	4917						
学生会員		517	599	593	598	565	621	601	645	629	631	669	677	729						
維持会員		226	250	247	245	243	240	263	264	270	271	280	270	266						
*2 計		4896	5054	5087	5074	5070	5205	5305	5432	5521	5667	5791	5832	5926						
正味財産 (百万円) *3		43	56	90	105	123	142	163	180	198	211	235	275	267						

(注) *1 開始年度 *2 年度末現在(名譽・団体会員を含む) *3 年度末現在

るものと思う。

創立 50 周年(1992 年 8 月 1 日)記念事業については、岸田有吉会長のもと向山光昭前会長を委員長とする組織委員会(小野田 武、岡崎廉治、北原 武、佐藤 匡、竜田邦明、野依良治、廣部雅昭、森 謙治の諸氏)で立案した。事業推進のため維持会員 227 社から臨時会費 3,200 万円(目標の約 92%)の拠出をいただき、これに国際シンポジウム参加費、祝賀会参加費などを加え財源とした。とくに臨時会費の募金に際し、創立 40 周年と同様に 1990、1991 年度の理事会メンバーが一致協力してこれに当たった。50 周年のメイン事業である有機合成国際シンポジウムは、森東大教授を委員長とする実行委員会(小野田、岡崎、鴨下克三、北原、桑嶋 功、竹内敬人、竜田、寺尾泰次、中井 武、奈良坂紘一、廣部の諸氏)が担当し、8 月 3 日、4 日、ホテルセンチュリーハイアットにおいて、ノーベル化学賞受賞者の Corey 教授をはじめとする著名な海外有機合成化学者の招待講演(計 5 件)と、海外から高い評価を得ている国内の若手教授による招待講演(計 4 件)と 81 件のポスター形式による研究発表を行った。また、野依名大教授を委員長とする記念出版委員会(小野田、鈴木啓介、平岡哲夫、村橋俊一、森、米光 宰の諸氏)が担当して、61 人の執筆者による英文の記念出版物「Organic Synthesis in Japan: Past, Present, and Future」を東京化学同人より発行し、シンポジウム登録者、臨時会費拠出維持会員、海外の著名な研究者等に贈呈し、わが国有機合成化学のビビットな活動状況ならびにその背景を世界に紹介した。浦 康一、大石 武両副会長が担当して、第一線の研究者と技術者による、有機合成化学の学術と技術の接点を探る 4 回シリーズの「座談会」を開催し、その要旨を協会誌に逐次掲載するとともに、小冊子にまとめ維持会員に送付した。廣部、竹内、竜田の諸氏が担当して、本会のイメージ向上活動の一環として、公募した 76 点の中より、本会会章を選定した。国際交流基金は、従来の研究交流事業資産と合わせ、今後ホットな海外研究者を招へいし、講演・討論の機会を作ることにした。記念号は、小川誠一郎、岡崎両編集担当理事が中心となり、50 周年記念特集号(第 1 部「協会と協会誌の歩み」、第 2 部「有機合成化学の現状と展望」)として、1992 年 12 月に発行した。50 周年記念事業は無事終了し、約 560 万円を国際交流基金とすることができたが、財務関係の佐藤 匡、藤田真作と小野田の諸氏には予算作成に当たり、ご苦労をおかけした。また、若手・学生アルバイトは、国際シンポジウムで大きな戦力となった。

3. 6 支部体制なる

1980 年の春、向山光昭副会長を委員長とする企画委員会(大石 武、小町谷吉興、戸田不二緒、鳥居 滋、辻 二郎の諸氏)が発足し、支部や賞等の問題を中心に検討後、太田暢人会長を議長とする理事会で審議した。全国的に支部体制を整備し、支部活動を中心とした運営に重点をおき協会の活性化をはかるとの目的から、1981 年に関東支部(石川延男支部長)、東北・北海道支部(伴義雄支部長)を設立した。既存の東海、関西、中国・四国、九州・山口の支部に合わせ、ここに全国的な 6 支部体制が完成した。とくに、東北・北海道支部の設立に当たり、在住会員 50 名以上の申し出が必要のため、当時の小倉治夫庶務理事はとりまとめに奔走した。現在、支部独自の事業のほか、本部からの助成金による若手研究者のためのセミナー(6 支部)、夏季大学(支部持ち回り)事業を活発に実施している。本部から各支部への割当金は 1983 年竹居光二、小柳俊一会計理事による支部の現状調査に基づき、1984 年度より現行の額に増額した。また、各支部の会員増強という努力に対し、入会幹旋料(正会員は会費の 10%、学生会員は 20%、維持会員は 20%)を送付している。

ここで関東支部について触れておきたい。1981 年設立時、支部事務所を三貴ビル内に置くこととし、全会員の約 47%を占める支部の運営や事業について討議した結果、春秋年 2 回シンポジウムを行い、原則として、春は群馬、埼玉、神奈川、千葉、栃木、茨城、山梨、東京の順に担当し、秋は新潟の 3 大学(新潟薬科大、新潟大工、長岡技術大)の持ち回りとした。第 1 回の群馬シンポジウム(群大工・右田俊彦教授担当)を開催して以来、今春で 25 回を数えるまでになっている。とくに、新潟シンポジウムは 1982 年上越新幹線が開業したことにより、他県からの参加者も多くなっている。わたしにとって思い出深い関東支部で主催した夏季大学がある。本部から支部持ち回りになって第 8 回の夏季大学は、1990 年 8 月 1~3 日箱根・ホテル花月園で開催(横国大工・井上誠一教授担当)したが、懇親会後のカラオケ大会では、三共の商業ソング・リゲインも飛び出すなど、参加者の平均年齢 29 歳という若さの熱気に、同席された向山会長も満足の様子であった。

関東支部の事業には可能な限り参加したが、他支部については 1980 年 7 月、関西支部の懇談会に参加した以外、時間的余裕もなくしてその他の支部に欠礼しており申し訳なく思っている。

4. 特別賞、奨励賞の制定と協会賞の強化

先の企画委員会で、現行の褒賞制度について検討のうえ理事会で審議し、1982年度より実施した。既存の協会賞については、学術的、技術的各1件を各2件以内と強化した。従来の若手研究者を対象にした論文賞(1件)については、前進的に廃止し、新たに奨励賞(4件以内)を制定し強化をはかった。

一方、1982年度が協会創立40周年に当たるので、これを記念して特別賞を制定し、有機合成化学上世界的にみてきわめて質の高い学術的、技術的内容の業績に対し本賞を贈ることとした。なお、特別賞、奨励賞の記念品については、本会の初代会長で1949年に文化勲章を受章した眞島利行元阪大総長(1874~1962)の肖像をモチーフにしたメダルとし、特別賞は純銀金張り、奨励賞は銅メダルで、原型製作者は彫刻家の瓜生啓一氏である。記念品の選定に当たり、ご子息の眞島行雄氏および石川延男副会長と芝 哲夫阪大名誉教授にお世話になった。協会賞の記念品についてはメダルとせず、永井芳男東大名誉教授が考案したファンデアワールを力象徴したベンゼンモデル(上段と下段を金メッキ、中段を銀メッキした6角型シンチュウ厚板)を存続させることとした。これらの記念品は(株)和光に製作を依頼している。

ちなみに、特別賞の第1回(1983年)の受賞者は、1958年に有機化学の分野で文化勲章を受章した野副鉄男東北大学名誉教授である。なお、奨励賞については、各支部の推薦委員会から推薦された候補者自身が選考委員会で説明(交通費支給)することになっており、受賞者は翌年の夏季大学に招待し講演をお願いしているので、若手会員の推薦を期待している。

5. 若手研究者と研究企画賞

長年の懸案であった研究助成事業の最初の試みで、この事業の目的は、有機合成化学分野における萌芽的研究(研究企画)に対して、本協会が助成事業の運営の主体となって、賛同企業の寄付のもとに賛同企業名(冠)をつけた助成金を贈呈することにある。従来の研究表彰が“優れた研究成果”に対してなされているのに対して“優れた研究の芽”に対してなされるのが特色で、本事業を通して有機合成化学分野における斬新な研究の推進を促がし、かつ学界と業界との関係をより密にすることを期待している。本件は辻 二郎副会長を委員長とする検討委員会(香川輝彦、寺島孜郎、中井 武の諸氏)で検討後、1987年度の竹西忠男会長を議長とする理事会で審議決定し、1988年度より第1回の研究助成事業を発足した。

写真上から協会賞と特別賞、奨励賞の記念品

1992年度で第5回となるが、受賞件数は毎年7~9件、受賞者は全国の大学にわたっている。応募資格者は、大学に属する40歳以下の本協会正会員(個人)で、審査・選考に当たって本人の姓名、所属は一切表に出ないことになっているので、若手研究者の積極的な応募を期待している。

本件は関連学協会に例を見ない初めての試みであるため、化学工業日報社の協力を得て大々的にPRした。最近、科学財団が萌芽的名を従来の研究助成の前につける記事を見かける。

6. 若手の育成と増強—若手研究者の ためのセミナー

1983年末の会員が前年度に比しマイナスとなったため、1984年会員増強委員会(大石 武, 小野田 武, 中井 武, 松井良業, 山辺正顕の諸氏)で討議した結果、学生会員より正会員への残留率は、過去7年間平均73%と他の学協会に比し高い点に着目し、学生会員の増強運動を展開した。入会のしおり、会員の特典資料の作成や、既存の正会員、維持会員の入会幹旋料に加え、学生会員の入会幹旋料・会費の20%を新設し、入会に協力した支部に送付することとした。会員増強運動の一環として、若手研究者の育成と学生会員の増強をはかるため、複数大学と企業の若手研究者を講師とする「若手研究者のためのセミナー」を、6支部で毎年開催することを1985年度より実施した。セミナーには本部より補助金を出しており、1993年度で第9回となるが、中国・四国支部では「若手化学者のための化学道場」の愛称で親しまれ、若手研究者の発表の場として好評を博している。

7. 協会誌回想

協会誌は本協会の顔であり大黒柱として、永年にわたる編集委員会の努力により今日のハイレベルに達した。ケミカルアブストラクトに掲載されて、世界の国々へ情報を提供しており、化情協のフォーラム誌によれば、国会図書館における化学関係雑誌の中で、本協会誌の利用頻度がトップクラスにランクされている。二次情報誌として高く評価され、文部省から1976年以来13年間交付されていた科学研究費補助金「研究成果公開發進費」が、1989年度の助成は欧文誌に限るとの方針で打ち切りとなった。時の内閣が国際化時代を標榜していたとはいえ余りにも短絡的発想である。予算上、補助金収入として545万円を計上していたので、この大穴を埋める緊急対策として、維持会員の格上げと新規入会運動を、2年間にわたり行い、無事乗り切ることができた。

8. 4人の侍と事務所移転

1980年わたしが入局以来、1991年7月に佐藤正行氏が事務局長事務取扱いとして着任するまでの約11年間は、松谷重雄(編集)、中村康宏(会員・事業)、黒岩通子(会計・庶務)の3氏とわたしの4人で切り盛りしてきた。入局当時は財政的にもままならず、理事会で中期財政計画を策定し「入るを計って出づるを制す」のもと会員増強、広告拡大をはかって、少なくとも1年分の支出金額に相当する基本金(正味財産)の保有を目標とした。た

だただ、新事務所への移転を夢みてお互に頑張ったのである。事務局員を増員せずに戦力となったのは学生アルバイトで、長期にわたり学生の派遣に協力いただいた北里大・薬の小倉治夫、膳 昭之助の両氏に感謝する。また、コピー機など事務機器の進歩に伴う能率向上の効果も大きく、とくに、1985年野崎 一会長の勧めでワープロ(キャノワード40)を導入し、秘書X人分の戦力となった。

1991年3月末、わたしは定年のため事務局長を退任した。引き継ぐことになった松谷氏は、一身上の都合で1993年3月末退職予定のため、7月に着任した佐藤氏が事務局長事務取扱いとして、実質的に事務引き継ぎを行い、松谷氏は名目上の事務局長として編集業務を継続した。わたしは創立50周年記念事業関係業務を担当した。

1991年8月22日、わたしとしては11年、他の3人は18年、悪い環境ではあったが住み慣れた事務所への複雑な思いを残して、三貴ビルからお茶の水の化学会館へ移転した。陽光が一杯の5階の新事務所へ—何のトラブルもなく完了したのは佐藤氏の手腕による(50周年記念号1061頁に詳細記載)。1992年7月、松谷氏の後任として編集担当の佐藤紀美子氏が入局し、一段と和やかな事務所となった。しかしながら、1955年入局後約37年間編集一筋に勤務してきた松谷氏は、1992年12月より入院加療中であったが、1993年3月12日朝昇天した。合掌

9. その他のこと—残照

(1) 会員増強と会費値上げ: 協会は中期の財政計画を立て、できる限り会費の値上げを避け、会員増強をはかってきた。ちなみに会費値上げは、

1981年: 維持会員(万円) 特級20→30, 1級15→22.5, 2級10→15, 3級5→7.5, 4級(新設)5

1982年: 臨時維持会費(創立40周年)

1983年: 正会員(千円)7→9, 学生会員(千円)3→4

1991年: 臨時維持会費(創立50周年)

1992年: 正会員(千円)9→11, 学生会員(千円)4→5

(2) 役員の増強: 1981年度より、副会長2名より3名、理事18名以内より25名以内、評議員50名以内より100名以内に増強した。

(3) 名誉会員: 1990年、名誉会員の取扱い内規を改正し、70歳の特別賞受賞者とノーベル賞受賞者(Corey教授は1993年2月の総会で推戴)を追加した。

(4) 他機関の賞: 1980年度より、他機関例えば、日産科学振興財団の学術研究の技術開発賞・補助金候補者の推薦のため、必要に応じ推薦委員会を設けた。

(5) 新会計基準：1987年度より、本協会も公益法人の新会計基準を採用し、決算報告書を作成した。

(6) 学術会議：1984年(第13期)より、学術会議の選出(推薦)方法が改正され、登録した学術研究団体より推薦した会員候補者を、登録した学術研究団体の推薦した推薦人の選考により、会員を選出することとなった。

(7) 出版物：1973年以来、協会出版物については久しくストップしていたが、創立40周年を機に出版企画委員会(委員長は新任の副会長)を復活し、1988年に「カラーケミカル事典」(編集委員長：飛田満彦氏、シーエムシー)、1990年に「有機合成実験法ハンドブック」(編集委員長：石川延男氏、丸善)を発行した。

(8) オーガニック：1985年野崎会長の発意により、米国 Organic Syntheses, Inc. からの好意で、1986年度より3回にわたり、Organic Syntheses を無料(送料本人負担)で会員の希望者に送付した。一時中断したが、向山会長の発意により、1990年度より学生会員に無料で送付した。

(9) 関係業者：永年にわたり協力いただいた業者として、技報堂(協会誌の印刷)、共栄通信社(広告の取扱い、1979年12月大正舎より変更)、新田製袋印刷(各種封筒)、高橋会計事務所、ミュージズ・アート・スタジオ、オーム社、日本印刷、ビッグウェーブなどがある。多謝

10. 亡き人びと

13年間に会員の多くの人びとが亡くなられたが、とくに協会のために尽力された人びとの名を掲げ、ここにご冥福をお祈り申し上げます。(敬称略・死亡年月順)

1980年：藤木経明

1982年：平泉貞吉、秋吉三郎、莊原和作

1983年：御園生 晃、堤 繁、加藤辨三郎

1985年：松井正夫、石村幸四郎、石田 栄、永井芳男、村田 淳、青山跡治郎

1986年：松川泰三、安東新午

1987年：友枝宗光、田伏岩夫、西村温樹、土橋源一、石井義郎、江連英則、飯塚雅夫、川崎京市

1988年：斯波忠夫、江口活太郎、永井洋一郎、亀谷哲治

1989年：関戸 実

1990年：水田政輝、後藤俊夫、林 茂助、中村正三、星野孝平、今泉 真

1991年：折戸 勇、菅澤重彦、石川延男、井本英二

1992年：吉越 昭、岡田時夫、小町谷吉興

1993年：松谷重雄、増尾富士雄

11. おわりに

時よ止まれと思いたくなるこの頃である。それ程、わたしの年齢となると過ぎてゆく時の重さをつくづく感じる。13年前「時といふ日輪の馬」は協会の車を曳いて走ったが、7人の会長以下一丸となって手綱をしっかりと握り、落石や崖を避けつつ車を御して、今日の協会を築くことができた。わたしは漸く協会の車から下りる許しを得たが、お世話になった多くの人びとに感謝の気持ちで一杯である。

これから21世紀へ向け、新しい日輪の馬は協会の車と曳いて走る。どうか森新会長のもと、手綱をしっかりと握り車を御してほしい。協会の一層の飛躍を祈り筆をおく。

(平成5年3月22日受理)